

# 「看護基本技術支援プログラム」が学生の 学習課題と自己学習及び臨地実習へ与えた影響

井上 千晶・井山 ゆり・吉川 洋子・長崎 雅子  
別所 史恵・秋鹿 都子・松本玄智江・松岡 文子

## 概 要

本研究の目的は「看護基本技術支援プログラム」後に行ったアンケート結果から、学生自身が捉えた学習課題と自己学習への取り組み、実習姿勢や看護実践への影響を明らかにすることである。その結果、学習課題として、〔看護技術〕、〔コミュニケーション〕、〔患者理解〕、〔自己の傾向〕の4つのカテゴリーが抽出できた。また、自己学習での技術練習は根拠や手順をおさえた練習をしていた。実習への影響としては、不安の軽減や技術への自信には至っていないが、実習への姿勢や態度、実習における看護実践に対して、学生の自己評価は高く、全体として学生はプログラムの影響を肯定的に捉えていることがわかった。

キーワード：看護基本技術、模擬患者参加型教育、臨地実習、学習課題、自己学習

## I. はじめに

我々は、2003年度より看護実践能力の向上、主体的学習への動機づけ、実習へのスムーズな導入を目的とし、3年次臨地実習（以下、実習とする）前の2年次生に対し、模擬患者参加型の看護基本技術支援プログラム（以下、プログラムとする）を実施している。このプログラムは、できるだけ臨場感のある模擬臨床場面を想定し学生が実習場にいるかのような状況の中で場面に応じた対応ができるように工夫している。また限られた時間の中でできるだけ多くの看護技術を学習できるように、同一患者に異なる4場面を設定し、1グループ4人の学生の誰がどの場面を行うかを当日の実施直前に決め、終了後に学生、模擬患者、教員が合同で実践をふりかえり、評価をするプログラムである（吉川、2004）。実習や技術修得への動機づけと、学生の能動的学習を促すことをねらって実施している。その結果、学生の自己学習を促し、実習に対する不安の解消や準備に役立っている（吉川、2004；井山、2005）。自己の課題が明確になることで、実習に意欲的に取り組むことができる

（松岡、2005）などの成果を得ている。今回は、2005年度のプログラム実施後に行った学生へのアンケート調査から、学生が捉えた学習課題を明らかにするとともに、プログラムが自己学習や実習にどのような影響を与えたのかについて検討したので報告する。

## II. 研究目的

プログラム終了後に学生自身が捉えた学習課題と自己学習への取り組み、実習姿勢や看護実践の自己評価から本プログラムが自己学習と実習に与える影響を把握する。

## III. 研究方法

### 1. 研究対象

2006年3月、第3回「看護基本技術支援プログラム」に任意で参加した3年課程A看護短期大学2年次生70名を対象とした。

### 2. 研究方法

1) 時期：2006年3月プログラム実施直後と2006年8月前半実習終了後（8科目中4～5科目終了）にアンケート調査を実施した。

## 2) 調査内容

### (1) プログラム実施直後

プログラム実施で明らかになった学習課題について自由記載で回答を得た。

### (2) 前半実習終了後

①プログラム実施後から前半実習終了までの実習に対する自己学習の有無とその内容について選択肢を設け回答を得た。

②実習に向けての意欲や学習課題の明確化などに関する4項目、実習での姿勢に関する2項目、看護技術、患者の個性性の考慮、コミュニケーションなど実習での看護実践の自己評価に関する21項目、計27項目について5段階（5：とてもそう思う、4：ややそう思う、3：どちらともいえない、2：あまりそう思わない、1：全くそう思わない）で回答を得た。質問27項目での信頼性を示すCronbachの $\alpha$ 係数は0.91であった。

なお、プログラム終了から約5ヶ月経過していることから、プログラム以外の影響も大きく関与すると考え、「プログラムの影響を意識して下さい」との説明を強調した。

### 3) 倫理的配慮

研究の目的、研究参加の自由、プライバシーの保護、協力の有無により不利益が生じないこと、データを目的外に使用しないことを書面と口頭で説明・依頼し、アンケートの提出により同意が得られたと判断した。アンケートは回収箱を設置して回収し、その後は速やかに番号化し保管した。

### 4) 分析方法

(1)自由記載から、学習課題に関する部分を抽出し、3名の研究者で意味内容を解釈し、類似性によって、サブカテゴリー化、カテゴリー化を行いネーミングした。

(2)アンケートは、「とてもそう思う」と「ややそう思う」を『そう思う』とし、「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」を『そう思わない』、『どちらともいえない』の3段階として単純集計を行った。

(3)自己学習内容・方法にプログラムの影響があるのかを把握するため、 $\chi^2$ 検定を行っ

た。検定にはSPSSVersion12.0J for Windowsを使用し、有意水準は5%とした。

## IV. 結 果

### 1. 学生の捉えた学習課題（表1）

プログラム実施直後のアンケートの回収率は92%（65名）、有効回答数62であった。

学生の学習課題としての記述内容から、〔看護技術〕、〔コミュニケーション〕、〔患者理解〕、〔自己の傾向〕の4つのカテゴリーが抽出された。〔看護技術〕では「看護基本技術の手技の修得」、〔知識の充実・根拠の明確化〕、「効率性」、〔応用力・工夫〕、「患者の安全・安楽を考慮する」、〔適切な誘導・説明〕の6つのサブカテゴリー、〔コミュニケーション〕では「コミュニケーション技術の向上」、〔傾聴・共感的対応〕、「否定的な言動への対応」の3つのサブカテゴリー、〔患者理解〕は「ケア優先順位の意識」、〔患者の個性性を考慮する〕、「患者のセルフケア能力を活用」、〔患者の立場・気持ちへの配慮〕の4つのサブカテゴリー、〔自己の傾向〕では「自分自身が余裕を持つ」、〔自己の傾向をつかむ〕の2つのサブカテゴリーがあった。特に、技術の向上、技術を行う上での根拠を知る、声かけの仕方、コミュニケーション技術の向上、個性性を考えたケアを提供するなどの記述内容が多かった。

### 2. 自己学習と実習への影響

前半実習終了後アンケートの回収率は66%（46名）、有効回答数46であった。

#### 1) 事前学習方法（表2）

プログラム終了後から今までの実習に関して「事前学習をしたか」の問いに全員が「はい」と回答した。事前学習をした動機は「プログラムの課題から自分で必要と考えた」と31名が回答した。その内容として、患者理解を深める学習は「実習病棟に合わせて調べた」37名、「実習科目に合わせて復習した」34名、などが多く「アセスメントの復習」は7名であった。技術の練習方法は「教科書や講義資料などで根拠や手順をおさえて練習した」38名、「教員にいわれた技術を練習した」37名、「自分で選択した自信のない技術を練習した」

表 1 2005年度プログラム終了後学生の学習課題 (自由記載) n=62

カテゴリー	サブカテゴリー	抽出数	記述内容	抽出数
看護技術	看護基本技術の手技の修得	15	基本的技術の手技の復習	1
			すべてのケアにおいて復習をする	1
			移乗方法	2
			点滴について	2
			基本技術をもっとしっかり頭に入れて、実習では確実にする	2
			技術向上	3
			手順を事前に確認しておく	1
			全然技術が身についてないので、いろんなパターンの練習が必要	1
	知識の充実・根拠の明確化	10	基本的なこと (18Gと23Gのどちらの針を使用するか等) 学びなおさなければならない	1
			根拠付けて学習していかななくては、看護技術は頭に入ってこない	1
			基本的な知識を完璧にする	1
			点滴の滴下数の計算、ルートをつなぎ方、点滴(与薬)について知識をつける	2
			技術を行う上での根拠を知る	4
			なんでもわかったつもりになるのももっと丁寧に勉強が必要	1
			効率性	6
応用力・工夫	6	いかに効率よく、経済的にできるかを瞬時に判断する力が必要	1	
		物品配置に気をつける	1	
		時間をすばやくやること	2	
		技術には時間がかかってしまうので繰り返しの練習と工夫が必要	1	
患者の安全・安楽の考慮	2	患者さんにとって安全・安楽を考える	1	
		1つ1つのケアを安楽で安全なケアができるようにする	1	
適切な誘導・説明	5	声かけの仕方	4	
		技術の必要性や効果を説明すること	1	
コミュニケーション	コミュニケーション技術の向上	17	コミュニケーション技術の向上	17
	否定的な言動への対応	3	患者さんの思いや不安への対応が難しかった	1
			否定的な言葉への対応の仕方	1
			「情けない」といわれたときになんて返していいかわからなかった	1
	傾聴・共感的対応	3	病気への不安な気持ちに対して耳を傾けるという姿勢をとる	1
			患者さんの不安の表出を受け止め、共感する	1
	傾聴・共感	1		
	ケア優先順位の意識	1	「いま何を一番にすべきなのか」ということを的確に判断していくこと	1
	個別性の考慮	5	個別性を考えたケアを提供する	4
			患者さんのニーズを満たしたケアをする	1
患者理解	患者のセルフケア能力の活用	2	患者さんのセルフケア能力を理解・確認して、できることはしてもらうようにする姿勢をもつ	1
	患者の立場・気持ちへの配慮	5	患者さんの残存機能を活かすことを考える	1
			患者の立場にたったケアを考える	1
			患者の気持ちを考えることを大事にする	1
			意見を尊重する	1
自己の傾向	3	患者への気配り	1	
		気遣いが必要	1	
		自分自身が余裕をもつ	2	
自己の傾向をつかむ	1	落ち着くことが大事	1	
		余裕をもって看護技術を行えるようにする	1	
			自分の癖がわかった	1

21名、「プログラムで実施しなかった技術を練習した」16名、「不明な点について教員の指導を受けた」15名、「プログラムで気づいた課題を練習した」は12名であった。「実際の練習はしていないが、本や講義資料を読んで復習した」は6名と少なかった。

また、事前学習をプログラムの課題から必

要と考えて行った学生とそうでない学生との差を見たところ、プログラムの課題から必要と考えた学生の方が「教科書や講義資料などで根拠をおさえて練習した」と答えており、有意差が見られた。(p<0.05)

## 2) 実習への影響と自己評価 (表 3)

プログラムの参加が実習へ与えた影響とし

表2 看護基本プログラム実施後から前半実習までの事前学習動機と学習内容(重複回答) n=46

学習動機		人
プログラムの課題から自分で必要と考えたから		31
教員に実習で必要といわれたから		17
教員に具体的に課題を提示されたから		18
その他		2

  

学習内容	対象理解	人数
	実習病棟にあわせて予想される疾患や治療について調べた	37
実習科目に合わせて、対象の特性を理解するために講義等を復習した	34	
不明な点について教員に指導を受けた	15	
アセスメントの仕方について復習した	7	

  

学習内容	技術練習	人数
	教科書や講義資料などで根拠や手順を押さえて練習した	38
教員に次の実習で必要性高いといわれた技術を練習した	37	
すべての看護技術の中から、自分で選択した自信のない技術を練習した	21	
プログラムで実施しなかった技術を練習した	16	
不明な点について教員の指導を受けた	15	
プログラムで気づいた課題を意識して練習した	12	
実際の練習はしていないが、看護技術の本や講義資料を読んで復習した	6	

表3 看護基本技術支援プログラム前半実習終了後 学生の自己評価 n=46

質問項目	回答		人数 (%)			
	そう思う	どちらともいえない	そう思わない			
1.実習に向けての意欲が高まった	36	78.3%	10	21.7%	0	0.0%
2.実習に対する不安が軽減した	24	52.2%	15	32.6%	7	15.2%
3.実習へ向けての課題が明確になった	38	82.6%	8	17.4%	0	0.0%
4.技術の実施に積極的に取り組むようになった	39	84.8%	6	13.0%	1	2.2%
5.自分の技術に自信が持てるようになった	20	43.5%	15	32.6%	11	23.9%
6.根拠つけて学習するようになった	33	71.7%	11	23.9%	2	4.3%
7.技術の実施について事前に手順を確認するようになった	40	87.0%	6	13.0%	0	0.0%
8.根拠を理解したうえでケアを実施するようになった	42	91.3%	4	8.7%	0	0.0%
9.実施する看護技術の意義と必要性を考えて実施するようになった	40	87.0%	6	13.0%	0	0.0%
10.患者さんの価値観や要望、習慣を把握し、援助ニーズを考えて実施するようになった	40	87.0%	5	10.9%	1	2.2%
11.可能な限り患者の習慣を尊重して、個別性に配慮した方法を考えて実施するようになった	41	89.1%	3	6.5%	2	4.3%
12.技術施行の目的、必要性、期待される結果及び影響について患者の理解状況にあわせ、説明・同意を得ることができるようになった	35	76.1%	9	19.6%	2	4.3%
13.準備、施行後始末の各段階を基本的な法則に基づいて正確に実施できるようになった	34	73.9%	11	23.9%	1	2.2%
14.技術施行過程において安全を確保しながら実施するようになった	40	87.0%	5	10.9%	0	0.0%
15.プライバシーへの配慮ができるようになった	44	95.7%	1	2.2%	1	2.2%
16.不快感を与えないなど安楽を考慮した方法を判断して実施するようになった	44	95.7%	1	2.2%	1	2.2%
17.個別性に配慮した方法を考えて実施するようになった	43	93.5%	3	6.5%	0	0.0%
18.患者さんの反応を見ながら技術の実施方法を調節するようになった	44	95.7%	2	4.3%	0	0.0%
19.患者さんのセルフケア能力を最大限活用することを考えて実施するようになった	42	91.3%	3	6.5%	1	2.2%
20.声かけを行いながら実施するようになった	40	87.0%	6	13.0%	0	0.0%
21.効率性を考えて実施するようになった	36	78.3%	10	21.7%	0	0.0%
22.患者さんの話に対して話しやすいように適切な雰囲気づくりをするようになった	33	71.7%	13	28.3%	0	0.0%
23.患者さんの気持ちを受けとめる工夫をするようになった	37	80.4%	9	19.6%	0	0.0%
24.患者さんの気持ちを受け止めた対応を考えるようになった	40	87.0%	6	13.0%	0	0.0%
25.患者さんに今後何かあればいつでも話して欲しいと伝えるようになった	40	87.0%	6	13.0%	0	0.0%
26.コミュニケーションのとり方を意識するようになった	41	89.1%	5	10.9%	0	0.0%
27.カンファレンスなどのディスカッションを大切にするようになった	41	89.1%	5	10.9%	0	0.0%

てたずねた、実習に向けての意欲向上や課題の明確化、不安の軽減などの4項目、実習での姿勢に関する2項目、看護技術、患者の個別性の考慮、コミュニケーションなど実習における看護実践の自己評価に関する21項目、の27項目のうち、『そう思う』が8割以上の項目は19項目であった。また、『そう思う』が7割以上は25項目であったことから、プログラムの参加が実習への姿勢や態度、実習における看護実践に対して、全体に高い自己評価であったといえる。特に「安楽を考慮した方法を判断して実施するようになった」、 「プライバシーへの配慮ができた」、 「患者さんの反応を見ながら実施方法を調節した」、 「患者さんのセルフケア能力を最大限に活用した」では9割以上が『そう思う』と答え高い評価であったが、一方「実習に対する不安が軽減した」の項目では『そう思う』は52.2%、「自分の技術に自信が持てるようになった」では『そう思う』が43.5%であった。

## V. 考 察

プログラムへの参加後に行った2度の調査により、8割以上の学生が「課題が明確になった」とし、学習課題として〔看護技術〕、〔コミュニケーション〕、〔患者理解〕、〔自己の傾向〕の4つのカテゴリーが抽出できたことから、プログラムに参加したことで学生は自己の学習課題を明確に捉えることができたと考えられる。

課題の〔看護技術〕の内容としては「看護基本技術の手技の修得」だけでなく、「知識の充実・根拠の明確化」が抽出できたことから、プログラムを通して学生は、知識・根拠と実際のケアを結びつけて考えることの必要性を再認識できたといえる。また、「効率性」、「応用力・工夫」、「患者の安全・安楽を考慮する」、「適切な誘導・説明」などが抽出された。これは、学生同士のロールプレイでは患者役の動きを予測しやすいが、模擬患者に援助を行う場合には「患者にあった援助」がその場で求められ、その援助に対しての反応を体験することができるために、実際の臨床現場で何が必要とされているかということが講義やロールプレイよりも具

体的に認識することができたためと考えられる。

また、〔コミュニケーション〕についての学習課題が多く抽出されたが、このことは、模擬患者の効果として学生はコミュニケーションへの気づきを多くあげた（清水、2002）との報告に一致する。プログラムにおいて学生は「情けないと言われたとき、なんと返していいかわらなかった」と記述しており、今までの学習ではイメージしにくい否定的言動や予測していなかった言動への対応にかなり困惑していた。学生は、患者とのコミュニケーションの体験から、自己の態度を振り返り患者を理解することからコミュニケーションの方法を見つけようとして（岩脇、2003）おり、プログラムの体験を通して、自己のコミュニケーション場面を振り返り、コミュニケーションを通して得た体験や情報などから個人にあったケアをすることの重要性を学ぶ機会となったと考えられる。

そして、〔患者理解〕に関する内容として「ケアの優先順位を意識する」、「患者の個別性を考慮する」、「患者のセルフケア能力を活かす」、「患者の立場・気持ちを考慮する」の内容が抽出できた。模擬患者からのフィードバックは普段聞くことのできない患者の気持ちを知ることができるため、学生は看護実践とは単なる技術の正確さだけでなく、患者を理解し、患者の立場や気持ちを考慮するなど、正確な技術と患者理解が合わさって看護実践となることに改めて気づくことができたと思われる。

また、〔自己の傾向〕として、「自分自身が余裕を持つ」、「自己の傾向をつかむ」が抽出された。このことからプログラムでは、他者評価の機会をもっており、その影響として自己の傾向や癖などを知ることにつながると考えられる。このように、模擬患者参加型の本プログラムの実施は学生がより実践に向けての具体的な課題を明確にすることにつながったといえる。

プログラム終了から実習までの自己学習については、46名全員が学習をしたと答えていた。その学習内容は実習科目や実習病棟にあわせて学習を行ったものが、プログラムで気づいた課題について学習した学生よりも多かったが、このことは、プログラム実施後から実習開始までの期間が短く、各実習のインターバル期間も短

いことから次の実習内容以外のことを学習する余裕は少ないことが要因として考えられる。一方、看護技術の練習方法は「根拠や手順をおさえた」が多くプログラムで明らかになった学習課題を自己学習に活かすことができたといえる。しかし、「不明な点について教員の指導をうけた」という行動は少なく、自己学習で得た知識や根拠としたこと、練習での手技が適切であるのかという確認はできていない。学生は指導をうけることで、自己理解や目標の明確化を促され、意欲を継続させるため、学生の自己評価が効果的に行われているかを検討する必要がある(坪田, 2003)。そのため、学習が適切であるかを確認する機会を設けるなど、教員の働きかけの方法を考えていく必要があると思われる。

プログラム参加の影響として実習への姿勢や態度、実習における看護実践に対しての自己評価のうち27項目中25項目において7割が『そう思う』と答えていることから、プログラムの実施は実習により影響があると学生は肯定的に捉えているといえる。また、特に「可能な限り患者の習慣を尊重して、個別性に配慮した方法を考えて実施するようになった」などの患者理解に関する項目は『そう思う』が多く、高い評価であった。模擬患者参加型学習をした学生は、しだいに患者にあったケア(援助)を見出すことができ、臨地実習を通して真の患者像に迫れた体験をしていた(加悦, 2006)との報告にもあるように、プログラムで明確になった課題が、実習につながったと考えられる。さらに、「安楽を考慮した方法を判断して実施した」、「プライバシーへの配慮ができた」、「患者さんの反応を見ながら実施方法を調節した」、「患者さんのセルフケア能力を最大限に活用した」では9割以上が『そう思う』と答え、高い評価であり、プログラムの実施がこれらのケアの実践につながり、自己評価が向上したと言える。一方、「実習に対する不安が軽減した」、「自分の技術に自信が持てるようになった」では『そう思う』の割合が低く、今回のプログラムでは不安の軽減や自信をもつまでには至らなかった。看護技術は、繰り返し実施することではじめて自信をもってできることである。学生にはプログラムで実施した看護技術はほんの一部であるという

ことや臨地実習では年代や疾患も様々な患者が対象となり、求められる知識や技術も簡単ではないとの認識があるためだと考えられるが、むしろ、自己の看護技術の未熟さや実習で求められるレベルを認識できたことが自己学習への動機づけとなったのではないかと考えられる。

## VI. 結 論

1. プログラムの参加により、学生は自己学習課題を明確に捉えることができ、自己学習に取り組んでいた。
2. 学習課題としては〔看護技術〕、〔コミュニケーション〕、〔患者理解〕、〔自己の傾向〕が抽出され、プログラム参加により根拠に基づいた技術、個別性を考慮したケアやコミュニケーションの重要性を認識できていた。
3. 自己学習への影響として、学生は実習科目、実習病棟にあわせた学習を行っていたが技術練習は根拠や手順をおさえることを意識して練習しており、プログラムでの学習課題が自己学習につながっていた。しかし、教員の指導をうけるという行動は少なく、知識や根拠としたこと、実際の手技が適切であるのかの確認はできていない。
4. 実習への影響として、不安の軽減や技術に自信をもつには至っていないがプログラムの実施は看護実践の自己評価により影響があった。特に「患者のセルフケア能力の活用」や、「プライバシーへの配慮」、「患者さんの反応を見ながら技術の実施方法を調節する」、「不快感を与えない安楽なケア」などにつながっていた。

## 本研究の限界と課題

自由記載による学習課題は学生の意見を反映していると思われるが、前半実習終了後アンケートの回収率は低く、アンケート内容が全体を反映した意見であるとはいえない。また、同一学生の変化を明らかにした評価ではないため、プログラムの影響を正確に把握するには至らず今回のアンケート結果からの考察および結論に

は限界がある。今後、プログラムの学生への影響を把握するよりよい評価方法を検討する必要がある。

## 謝 辞

本研究の主旨を理解し、アンケート調査に協力いただきました看護学生の皆様に心より感謝いたします。

## 文 献

井山ゆり，長崎雅子，高梨信子，馬庭史恵，吉川洋子（2005）：模擬患者参加による「看護基本技術支援プログラム」の開発，看護展望，30（5），96-102.

岩脇陽子，滝下幸栄，松岡知子（2003）：臨床実習におけるコミュニケーション技術に関する研究－基礎看護実習における2年次の習得状況－，京都府立医科大学看護学科紀要，12（2），111-120.

加悦恵美，飯野矢住子，河合千恵子（2006）：

基礎看護学におけるSP参加型の授業と臨地自習の連繋－学生の臨地実習の体験の振り返りから－，日本看護科学会誌，26（2），67-75.

清水裕子，大学和子，野中静（2002）：基礎看護技術実技試験におけるSPを導入したOSCEの試み，聖母女子短期大学紀要，15，53-63.

坪田和美（2003）：看護基礎教育における自己教育力，看護教育，44（3），242-244.

松岡文子，吉川洋子，別所史恵，秋鹿都子，長崎雅子，井山ゆり，高梨信子，曾田陽子（2005）：「看護基本技術支援プログラム」の臨地実習への効果，鳥根県立看護短期大学紀要，11，43-49.

吉川洋子，馬庭史恵，井山ゆり，長崎雅子，高梨信子（2004）：看護実践能力向上への看護基本技術支援プログラムの影響（第2報），第35回日本看護学会論文集－看護教育－，208-210.

## The Influence of the Basic Nursing Skills Support Program on learning , self-learning and practicum for nursing students

Chiaki INOUE, Yuri IYAMA, Yoko YOSHIKAWA, Masako NAGASAKI  
Fumie BESSHO, Satoko AIKA, Ichie MATSUMOTO and Ayako MATSUOKA

### Abstract

The purpose of this study was to clarify the influence of 'The basic nursing skills support program' (encompassing the subjects of learning, self-learning and practicum) on nurses. We performed a questionnaire investigation on selected nursing students. For nursing student results regarding the subject of learning, we found that learning can be classified into four categories including: Nursing skills, Communication skills, Understanding the patient, and Self-understanding. In the second area of nursing students' self-learning, we found that they understood that the practicing of nursing skills needs basic skills learned in the correct order. As for the influence of the program on the nursing students' practicum, we found that this program was a very good influence for the nursing students' practicum for all who took part in the program.

**Key Words and Phrases:** basic nursing skills, nursing education with a simulated patient, practicum, subject of learning, self-learning.